

エッセイ

Squat the World!

拡大する居住運動と地域住民との共犯関係

久保田裕之

スクワット (Squat) に関する月に一度の集会への参加を許された僕は、会場となった「Barcelona」というカフェの入り口近くの柱に寄りかかって議事の進行を追いながら、30人ほどのパンクな若者たちが寿司詰めになった部屋の隅からリレー式に運ばれてくる擦り切れたマットレスを、視界の端で見るともなしにぼんやりと眺めていた。それは、最終的に僕に手渡されるためのものだった。集会を仕切っていた二十歳そこそこのポーランド人の女の子が少しだけ声を張り上げると、彼女の下唇で三連のピアスが震えた。

「すぐ近くに、もう一ヶ月誰も住んでいない部屋と、二週間誰も住んでいない部屋があるの。今日はその二箇所をスクワットします。沢山集まってくれてありがとう。ふた班に分かれて、工具を持った人が先にドアを壊すから、荷物を運び込む人は必ず合図を待ってから動いて。絶対に合図をするまで動かないように。部屋に荷物を運び込んだら、鍵を修理して内側からロックします。それまでの間、何が起ころうか分からないから、他の人たちは中の人を守ってあげて。それじゃ、静かに、早くね」



状況を把握しきれない僕はマットレスを抱えたまま、パンクな若者たちに押し出されるようにカフェを出ると、簾とガラスで出来た小さなテーブルを運ぶモヒカン頭の男の子と、木製の丸椅子を運ぶやはりモヒカン頭の男の子の後に続いて、赤いレンガの壁伝いに左に折れた。オランダ特有のどんよりと垂れ込めた厚い雲から、夏の終わりの冷たい雨がパラパラと降り始めていた。工具を持った先発隊が目当ての建物の階段を駆け上がって行くのを見送り、彼らがパールで他人様の家のドアをこじ開けるのを息を殺して待ちながら、これは困ったことになったと僕は思った。

売買春の合法的な管理や、ソフトドラッグ使用の不処罰などで有名なオランダの首都・アムステルダムは、スクワッター (Squatter) と呼ばれる空き家の不法占拠者に対する保護が厚いことでも知られている。もちろん、建物には所有者ないし管理者がいるわけで、スクワットは建物所有権への明確な侵害である。ただし、アムステルダムでは、ベッドひとつ、机ひとつ、椅子ひとつを備えて一年間居住の事実があれば一定の居住権が発生するという特殊事情がある。この日の会場となった「Barcelona」というカフェも、つい先日にも占拠開始から丸一年が過ぎ、盛大な祝賀パーティーを終えたところだった。

他方、日本では不法占拠という「占有屋」を思い浮かべてしまう。競売にかかった物件などに、みるからに怖いお兄さんが住みつき、毎晩麻雀に興じながら競落価格を引き下げたり法外な立退き料を要求したりする違法か違法スレスレの商売だ。だから、今日僕がここで万一警察に逮捕されたりしたら、日本の人の目にはどう映るだろう。そもそも今回は調査研究のために大学からお金を貢いで来ているのだ。国民の血税で遠い空の下まで旅をさせてもらっておきながら、不法行為にコミットしたことが新聞沙汰になれば、僕の研究室や大学全体に多大な迷惑がかかるかもしれない。この不景気の折、群馬の年老いた両親は曾祖父の代からの酒屋を続けられるだろうか。正直、僕はスクワットに関する会合に参加するつもりはあったがスクワットに参加する心の準備まではできていなかった。

しかも間の悪いことに、ここ数年ヨーロッパ各地で歴史あるスクワットिंगが強制的に排除されてい

くなか、アムステルダムでも、建物所有者を保護してスクワットを取り締まる法律改正の話が浮かんでは消えていた。ややもすると、いつ大規模な衝突や暴力的排除が行われてもおかしくないという緊張感も漂っている。実際、僕がアムステルダムに着いてからの13日間、squat.netに掲載されたリストを頼りに、身長165センチの僕には不釣り合いに大きな自転車を使っ街のスクワットを訪ね歩いてきた。けれど、そのうちの3分の2は既に排除されたか、移転を余儀なくされていた。現在も残っているのは、80年代の大規模なスクワット運動を経て、建物を買収するなどで合法化された結果、現在では公共の施設のようになっている著名なスクワット、いわば、トラディショナル・スクワットがほとんどだった。

トラディショナル・スクワットは、字義通りの意味ではもはやスクワッター (不法占拠者) ではないが、その歴史と記憶と精神を示すために、また、かつてその場所が土地の私的所有に抵抗した証としてスクワットのシンボルをあしらった黄色い横断幕を掲げ、現在もスクワットを名乗り続けている。これに対して、いま僕の目の前で進行しているのは現に不法な占拠を開始する正真正銘のスクワット、いわば、ホット・スクワットだった。「Barcelona」のように占拠開始から一年を経過して、居住の権利が発生していたとしても、依然としてこの建物は他人の所有であり、そこには常に衝突の契機が潜んでいる。にもかかわらず、彼女たちはこのカフェを拠点として、周辺の空き家へ向かってさらなる規模の拡大を狙っている。そして、なぜか僕はその先頭にいた。

大きなマットレスを持って余して階段を上りあぐねている僕に、見かねたドレッド・ヘアの女の子が手を貸してくれた。彼女は首尾よく破壊されたドアからマットレスごと僕を部屋に押し込むと、廊下側から「がんばって」と言ってドアを閉め、小走りで階段を下りていく。内側では肉原の金網を部屋の中から玄関のドアに押し当て、工事現場の足場に使う鉄パイプを斜に噛ませると、突っ張り棒の要領でクルクルとクランプ部分を回転させ、ドアを内側から完全にロックした。これで、誰も入ってこられない。そして、僕も部屋から出られなくなっていた。

スクワットという言葉聞いたことがある人にとっては、大都市におけるスラムというか、雨露を凌ぐためにやむなく廃屋に大勢集まって暮らすホームレスの人々というイメージが先行するかもしれない。しかし、ここアムステルダムや、ロンドン、ジュネーブ、ベルリン、NYなどでは、より社会運動としての色彩が強いスクワットも存在する。とりわけアムステルダムでは、居住運動と芸術運動、そして生活運動とがスクワットにおいて複雑に絡み合っているように思える。というのも、最初は不法に占拠した建物を、一年持ちこたえて一定の居住権を獲得したあとNPOから資金を借りるなどして買い取り合法化する一方で、自分たちで家屋を改装しながら、地域住民に対して様々なサービスを提供していく場合が多いからだ。具体的には、カフェ、レストラン、クラブ、ライブハウスから、アートギャラリー、児童劇のための小劇場、インターネットカフェ、パソコン教室、はたまたサウナまで、そのサービスは多岐に渡る。

たとえば、1999年の占拠開始から紆余曲折を経て、最終的に2006年にEHBK（英語でFirst Aid by Art）というアート関連NPOの資金で建物を買い取ることに成功したというトラディショナル・スクワットのひとつ「Overtoom301」は、現在も20人近くが上層階に住んでいる。居住者は取り壊しを待つ映画学校だった建物を断続的に改装して、ライブハウス、レストラン、オーガニックカフェ、卓球場や囲碁教室、そして映画館を備えるに至っている。なかでも活発なのはライブハウスで、才能ある若いバンドに無料でスタジオを貸し出し、居住者が照明の操作やバーテンまで裏方を引き受ける。ライブの入場料（5～8ユーロ）は全てバンドの儲けになるため、会場の使用申し込みには長いリストに名前を連ねる必要がある。また、もともと映画学校だけあって、わずか4ユーロで本格的な椅子に体をあずけ、巨大スクリーンで映画を楽しむことができる。言い忘れたが、アルコールなどのドリンク代は会場の収益になり、老朽化した部分の修繕費や、買い取り資金の返済などに充てられる。ちなみに借入金を完済したあとは、これらの収益をアート関連NPOにプールする側に回り、次のスクワットにおける建物買い取り資金として融資することで、いわばスクワットの拡大再生産を可能にしている。

閑散とした部屋の中をそわそわと歩き回る僕を尻目に、テーブルを運ぶ係だったモヒカン頭の男の子は、舌気にもギターを調弦を始めていた。聞けば、スクワットは最初の一週間は肝心らしく、一週間の間は交代で誰かが部屋を守り、片時も部屋を空けないことが重要だという。そう真剣な顔で話す彼の足元には、散乱したドアの破片に混じって、カートン買いの缶ビールやスナック菓子、トランプ、お気に入りのCDなどが既に広げられていた。いつの間にか14インチテレビも運び込まれている。ちょっとした合宿気分なのかもしれない。部屋は、2DKというか狭めの2LDKといった間取りで、シャワーとトイレが完備されていた。もっとも、ところどころ壁のペンキが剥がれていて、中庭に面した木製のベランダは朽ちてほぼ無くなっていたが骨組みは残っており、修理すれば使えるようになるかもしれない。

ここには何人くらい住むのかと聞くと、自分を含めて2人くらいじゃないかという返答に驚いた。30数人が集まってようやく占拠した家に、2人しか住めないとは。スクワットとはいえ一人が一部屋を使うのは、当然のプライバシーだという。彼らは路上以外住む場所がないからやむなく空き家のドアを破るのではなく、より良い人間的な暮らしを求めて空き家のドアを蹴破るのだ。それも、外部から孤立した暮らしのためではなく、居住者同士が、あるいは利用者との間で、地域住民との関係の中で、より豊かに生きるためにドアを蹴破るのだ。

考えてみると、アムステルダム型のスクワットにおける周辺住民への積極的なサービスの提供は、第一にスクワットへの重要な収入源となり、居住者の経済的負担を軽減しているの言うまでもない。通常、アムステルダムの中心部に同程度の部屋を構えるには500～600ユーロが必要だが、たとえば「Overtoom301」では300ユーロほどで全てが賄えるという。のみならず、第二に、スクワットという一種のフリースペースを求めて集まる様々な文化・芸術活動のインキュベーターとして機能することで、「Overtoom301」の場合のように、アート関連団体からの支援、たとえば建物買い取り資金の融資を取り付けるための根拠を獲得している。このような大規模な支援でなくとも、格安で利用できるライブハウスを求めている若いアーティストたちは、この日「Barcelona」に集まった30人のように、スクワットの拡大を支援する動機を持つことになる。さ

らに第三に、不法占拠によって得られる空間的経済的メリットを、アートやサービスを通じて有料で、しかし格安で周囲にばら撒いてしまうことで、地域住民をも一種の共犯関係におく。この周囲との信頼関係、というより利害関係は、暴力的な排除の危機に立たされたときに周囲のサポートを取り付けるといって極めて重要になってくる。スクワット開始から三ヶ月の間にどれだけ周辺住民の役に立てるかで、スクワットの成否が分かれるとさえいえるだろう。このように、スクワットにおいては、その場に暮らす者のみならず、その場を利用するアーティストと、その場から利益を得る地域住民までも、たとえ崇高な政治的目的まで持たなかったとしても、利害関係において支援者に転ずることを可能にしている。

しばらくして、二人の警官が小雨のなか気乗りしない足取りで建物の前に現れたときには、僕は下の状況を伝えにきてくれた連絡係と入れ違いに部屋から脱出することに成功していた。もし、何も知らずに部屋で警官と対面していたら、その場で卒倒していたにちがいない。二人の警官はそこが確かに空き家であって誰かが現に住んでいる家ではないことを確認すると、コーヒを飲みながらまた気だるそうに帰っていった。これは後から聞いた話だが、警官を呼んだのは実はスクワッターたち自身だった。警察は、この日のような空き家への「穏当な」スクワットには感知しない。それどころか、逆に暴力的な排除を牽制してくれる存在でもある。これがオランダ流の「民事不介入」かと驚かされる。

こうして、時計の針が動き始める。今日から数えてちょうど一年後、スクワッターたちはこの建物に居住権を得ることができるのだ。目的は達成され、霧雨のなか三々五々に引き揚げて行くバンクな若者たちの背中を見送りながら、僕は何もできなかったこの約60分間の自分の小心を恥じていた。

*

数日後に同じ場所を訪れると、先日のスクワッティングを指揮していたポーランド人の女の子が午後の日差しの中、カフェの前の木製のベンチに腰掛けて本を読んでいた。アメリカ史の本だという。僕は彼女に読書の邪魔をしたことを詫言、このカフェもやがて所有者から買い取る予定なのかと聞いてみた。

「それはわからないわね。確かに安定を望む人にとっては、家賃を払ってでも場所を買い取るのは重要なことだと思う。子供を持つ母親とか、病気を抱えた人とか。でも、もしこの場所を買い取るということになったら、私はここを出て、また別のどこかをスクワットすると思う。だってそっちのほうが安いし、楽しいから。私は今100ユーロしか稼いでいないけど、その自分分の時間があるから、みんなで料理をしたり、話をしたり、一緒に活動をしたり、こうやって読書をしたり」

なるほど。占拠した建物を買い取ることで運動は広がるが、買い取る際に出て行く人たちによっても、運動は広がっていくのか。でも本当に週に100ユーロで暮らしていけるのかと聞き返すと、週100ユーロじゃなくて、月に100ユーロだと訂正された。月に100ユーロ。日本円で約1万6千円。時給800円として、20時間。週に5時間の労働時間。収入の50%を税金や社会保障関連費用として払ったとしても、倍の10時間働けばいい。一日5時間で2日。残りの5日間は、僕なら何をして過ごすだろうか。アムステルダムのスクワットが提起するのは、違法性や不法性ではなく、僕らの生活そのもの、運動のあり方そのものに対する、もっとずっと根源的な問いではないか。

帰り際に、僕も日本でスクワットを試してみたくなったと話すと、日本では危険すぎるから無茶はよせと諭されてしまった。居住運動、芸術運動、生活運動が際どく交錯するアムステルダムのスクワッターに会うために、僕は一年後この街に戻ってくる。僕らがドアを破ったあの部屋は、そのときどんな場所になっているだろうか。